

ミカン生育情報

千葉県
平成 28 年 8 月号

平成 28 年 7 月の気象

平成 28 年 7 月の半旬別の気象を表 1 に記した。平均気温は、第 1 から第 4 半旬は平年と同じか高かったが、第 5 及び第 6 半旬は平年より低かった。月平均気温は 24.0℃で、平年より 0.4℃、前年より 0.5℃低かった。

降水量は第 2 及び第 5 半旬を除く 4 半旬で平年を下回り、第 1 及び第 4 半旬では降雨がなかった。月合計は 114mm で、平年の 66%、前年の 38%であった。

日照時間は、第 4 及び第 5 半旬を除く 4 半旬で平年と同じか上回った。月合計は 182 時間で平年の 108%、前年の 88%であった。

梅雨明けは 7 月 28 日ごろで、平年より 7 日、前年より 18 日遅かった。

表 1 平成 28 年 7 月の気象 (暖地園芸研究所)

半旬	平均気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	24.2	22.9	21.1	0	38	190	40	21	1
2	23.4	23.4	20.8	66	36	76	26	23	11
3	24.6	24.6	25.8	1	36	0	28	25	56
4	25.3	24.6	26.0	0	21	31	23	28	33
5	22.0	24.8	26.0	40	21	1	23	32	46
6	24.7	25.8	26.7	7	22	0	42	42	61
平均/計	24.0	24.4	24.5	114	173	297	182	169	208

果実及び樹の生育

南房総市内の 2 か所の園地と暖地園芸研究所における温州ミカンの園全体の着果量は、早生温州、普通温州ともに昨年より少ない。しかし、樹によるバラツキがあり、着果が多い樹も見られる。生理落果は、ほぼ平年並みである。

8 月 1 日における調査園の果実生育状況を表 2 に示した。早生温州は横径、縦径の平年比がそれぞれ 107、104%で平年を上回っていた。普通温州は横径、縦径の平年比がそれぞれ 111、109%で平年を上回っていた。また、「川野夏橙」は、横径が 119%、縦径が 115%で平年を上回っていた。前年から調査している極早生温州「日南 1 号」は、横径、縦径が前年比 105、102%であった。

本年は、果樹カメムシ類の発生が多い。暖地園研内でのミカンサビダニの被害果実は、葉液のかかりにくい樹冠内部で多くみられ、樹冠の外側でも散見された。温州ミカンでのそうか病の発生は散見される程度、かいよう病は一部中晩柑やレモンで発生がみられる。

表2 果実の生育（平成28年8月1日）

No.	種類・品種	調査地	横径 (cm)		縦径 (cm)	
1	興津早生	三 芳	4.4	(118) *2	3.9	(115) *2
2		千 倉	3.9	(100)	3.5	(99)
3		暖地園研	3.9	(102)	3.4	(99)
4	大津4号	三 芳	3.9	(107)	3.4	(107)
5		千 倉	4.1	(108)	3.4	(106)
6		暖地園研	4.2	(119)	3.4	(114)
7	青島温州	三 芳	3.9	(107)	3.4	(108)
8		千 倉	3.9	(104)	3.3	(102)
9		暖地園研	4.3	(119)	3.6	(116)
10	川野夏橙	暖地園研	5.7	(119)	5.2	(115)
11	日南1号	暖地園研	4.7	(105) *3	3.9	(102) *3
	平均*1	早生温州	4.1	(107)	3.6	(104)
		普通温州	4.1	(111)	3.4	(109)

() の数字は平年値（平成8～27年の平均）を100とした比数 ※「日南1号」は2015年から調査

*1 早生温州：No.1～3の平均、普通温州：No.4～9の平均

*2 三芳地区「興津早生」は1樹20果の平均、その他の品種は1樹40果の平均

*3 「日南1号」は前年の値を100とした比数

8～9月の栽培管理

・摘果

本年は裏年であるため、園全体の着果量は少なめである。しかし、着果量や肥大状況は園地や樹によるバラツキが見られるため、それぞれの樹にあった摘果を行う。着果量の多い樹は、早生温州は8月終わりまでに仕上げ摘果、収穫1ヶ月前頃までに樹上選果を行う。普通温州の仕上げ摘果は8月以降に行う。仕上げ摘果は果実の大きさや外観、品質を揃えるための作業で、適正葉果比（早生温州では30葉に1果、普通温州では25葉に1果）に近づけるようにする。

着果量の少ない樹は、着果負担や水分ストレスがかかりにくくなり品質が悪くなるため、粗摘果は行わず仕上げ摘果を遅らせ9月以降に行う。

中晩柑類の摘果は、品種により時期・葉果比が異なるため、事前に調査をする。

・マルチ資材の被覆

高品質果実の生産にマルチ栽培は有効である。被覆の時期は、早生温州は7月下旬、普通温州は8月上旬を目安に開始する。果実表面の緑色が淡くなり始め果肉が赤みを帯び始める時期までは土壌水分を制限する。土壌の乾きやすさや灌水設備の有無によって、被覆開始時期や地表面に対する被覆割合を調節する。マルチ栽培の適地は、水はけと日当たりが良く、着果量が中程度以上の園地である。水はけが悪い園地では、排水性を向上させ、併せて間伐（冬期実施）と防風垣の刈り込みを実施し日当たりを良くする。

・病害虫の防除

防除に際しては、千葉県農作物病害虫雑草防除指針を参考に行う。

温州ミカン

果樹カメムシは園地の立地条件により飛来する量が異なる。加害により、落果や食べる際に果皮がむきにくくなる等の被害が出る。日暮れ頃に園を見まわり、飛来数が多い場合は、薬剤防除を行う。防除は動きの緩慢な朝方か、飛来の多い夕方に行う。

ミカンハダニは気温が低下し始める8月下旬以降に増殖する。この時期の加害は果実の外観を悪くするため、収穫期まで発生に注意し防除を行う。9月以降の防除の目安は、寄生葉率20%（葉10枚のうち2枚にハダニが寄生している状態）である。

ミカンサビダニは高温乾燥条件で発生量が増える。7～9月頃は果実上で生活しているため、果実が加害される。前年に発生が見られた園や7月に防除を行っていない場合は注意深く観察し、初期防除に努める。なお、ダニ類の防除の際には、同じ系統の成分を含む殺ダニ剤の連用は避ける。

黒点病は降雨により伝染するため、秋雨前に防除を行う。樹上の枯れ枝が伝染源となるため、見つけ次第ハサミ等で取り除く。収穫の早い極早生温州では、農薬の使用から収穫までの日数と使用回数について、特に注意をする。

褐色腐敗病が前年に発生した園では、園を注意深く観察し、発生がみられた場合は早期に農薬の散布を行う。毎年発生している園では、長雨の前に予防的に農薬を散布する。

中晩生カンキツ類

病気の発生のしやすさは、品種や園の条件によって異なる。そのため、品種及び園により防除の必要性が異なる。また、温州ミカンと混植・隣接している場合は、登録内容が温州ミカンと異なる薬剤もあるため使用には注意を払う。

9～10月はミカンハダニの発生に注意し、防除を行う。

台風の前には、かいよう病対策として銅水和剤を散布する。高温時は、銅水和剤による薬害を軽減するため、クレフノン（200倍）※を混用する。

秋雨前に黒点病の防除を行うが、農薬の使用から収穫までの日数に注意をする。

※農薬の登録内容は変更になる場合があるため、農薬使用の際は最新情報を確認する。

なお、表の数値は表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計は一致しない場合があります。

《 生育情報の問合せ先 》千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室 電話 0470-22-2961※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>